

平成 28 (2016) 年度上半期 国語科における授業実践記録 および評価に関する取り組み

First Half of SY 2016 Class Practice Records in the Japanese Language Class and Initiatives Related to Evaluation

国語科

愛甲修子 浅井悦代 石川直美 宇佐見尚子 杉本紀子
中野久美子 西村 諭 廣瀬 充 若宮知佐

1. はじめに

本校では、1 学年から 4 学年において、日本の学習指導要領と並行して国際バカロレアの MYP (Middle Years Program) に基づいた指導を行っている¹。このプログラムは、概念理解の重視、探究的な学習など、いくつかの視点から特徴づけられるが、本稿では評価規準を中心に本校国語科での取り組みを示したい。

2. 国語科の 6 年間の評価規準

本校国語科では、目指す資質・能力の育成にあたって、各学年で下に示す評価規準を設定している (図 1)。1 学年から 4 学年は MYP の評価規準に準じているが、5 学年と 6 学年はそれをもとに本校独自に設定したものであり、DP における評価もこの規準を使用している²。

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
IB 型 (認知ベース)					知識・理解	
	分析 (Analysing)				分析	
	構成 (Organizing)				構成	
	創作 (Producing Text)					
	言語の使用 (Using Language)				言語の使用	
文科省型 (技能ベース)	国語への関心・意欲・態度			関心・意欲・態度		
	話す・聞く能力			話す・聞く能力		
	書く能力			書く能力		
	読む能力			読む能力		
	言語についての知識・理解・技能			知識・理解		

図 1 本校国語科における評価規準

2. 1 IB 型認知ベースの評価規準

比較すれば分かるように、文科省型が「話す・聞く」「書く」「読む」という 4 技能のそれぞれ

¹ 5 学年と 6 学年は MYP の対象外であるが、その方向性の上にあると考え、一貫性のあるカリキュラムの作成に取り組んでいる。また、今年度より DP (Diploma Program) が始まり、一部の生徒はそのプログラムを受けている。

² 1～4 年と 5・6 年の違いとして「創作」と「知識・理解」の規準の有無があるが、これは高学年の方が内容に対する知識量・理解度を測る必要性がより多いことによる。

れに対して規準を設けているのに対して、IB型では各言語技能を構成する諸要素に細分化して規準としている。これは、項目名が「～ing」という動名詞になっていることにも表れているように、実際の言語技能に対して、それが発揮されている際の動的な思考の働きを評価しようとする姿勢の表れであると言えよう³。一言で言えば、前者が「技能ベース」の評価規準であり、後者は「認知ベース」の評価規準だということになる。

IB型の評価規準のメリットは、まさにこの、一つの言語技能に対して複数の規準で評価できる点にある。例えば、「書く」という技能一つをとっても、そこには、書くにあたっての対象に対する「分析」や、論理的に一貫性をもたせるための「構成」、創造的な思考を働かせて自身の考えを表現する「創作」、適切な語彙や文法を駆使する「言語の使用」といった認知的な側面が認められる。同じ「書く能力」でも、対象に対する分析や独創的な視点からの記述はできているが構成があまりうまく整っていない、といったケースは、国語科の教員であれば誰もが遭遇するものだろう。

つまり、従来は「書く」ことに対する評価はまるごと「書く能力」として評価していたものが、より学習者の実態に即した具体的で綿密な評価が可能になる。単元で実施する課題を毎回すべての規準を用いて評価するかは別として、各技能に対して複数の規準で評価することは自然なことであり、IB型の評価規準の優れている点であると言えよう。

2.2 IB型と文科省型の評価規準の関係性

IB型では、一つの学習活動に現れた複数の認知的側面を正確に捉えるために、評価規準をさらにストランド(要素)に細分化している。次ページに示すのは、評価材料として具体的にどのような活動・課題をどのような要素として切り取って評価をしているかという一例である(図2)。あくまでも一つの例であり、授業者や単元によってはここに載せていない活動・課題で評価したり、類似の活動・課題でも異なる規準で評価したりすることが考えられるが、上で述べたような各言語技能に対する複数の認知的側面を捉えるには、このような形で整理しておくことが好ましいと思われる。

その他の特徴として、IB型の規準においては「関心・意欲・態度」にあたる規準が存在しないことが表を見ると分かる。これを本校国語科では、「関心・意欲・態度」があればそれが必然的に成果物の出来栄を左右する」と捉え、各規準に細分化して反映させているが、その前提としてはIBの学問的誠実性(academic honesty)やATL(Approaches to learning)スキル⁴などに対する教科を越えた総合的な指導がある。引用の仕方や出典の示し方などを中心としたフォーマットに対する意識づけ、提出期日に対する厳格性もその一部である。

3. 上半期の授業実践記録

参考資料として、今年度の上半期に1学年から6学年において展開された国語科の授業実践を表に示した(図3)。1学年～4学年まではMYPに基づくため、MYPにおいて単元設計に必要とされている、Key concept(重要概念)、Global context、Statement of inquiry(探究テーマ)と使用教材を記載した。

³ 以前のMYPにおける評価規準は「A 内容(Content)」「B 構成(Organization)」「C 言語の使用(Style and language mechanics)」となっていたが、2014年より(本校では2015年度以降)現行のMYP(Next Chapter)のものに切り替わっている。

⁴ 学問的誠実性はIBにおける基本的な理念の一つであり、学習者はいかなる学問的不正行為も行っていないとされる。ATLは学習を効果的に進めるために身につけるべきスキルであり、言わば「学び方についての学び」である。

IB型 文科省型	知識・理解 (5・6年のみ)	分析	構成	創作 (1-4年のみ)	言語の使用
関心 意欲 態度	<ul style="list-style-type: none"> ・ディベートにおいて、根拠となる資料を活用しながら話している。 ・相手の主張の要点を聞き取り、メモしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ディベートにおいて、勝敗の判定をし、その理由を説明している。 ・インタビュアーにおいて、相手の話していることを理解し、まとめていく。 ・相手の主張や情報の要点を聞き取り、それに対して質問している。 ・話し言葉の特徴について分析し、説明している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スピーチにおいて、構成に工夫をして話している。 ・討論において、相手の意見を踏まえて、自分の考えを述べている。 ・ディベートにおいて、一貫性のある主張を述べている。 ・プレゼンテーションにおいて、資料の体裁を整えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スピーチやプレゼンテーションにおいて、独創性のある題材を選んでいる。 ・スピーチやプレゼンテーションにおいて、具体的なエピソードや例えを交えながら話している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き取りやすい発音・発声で話している。 ・効果的なジェスチャーや表情で話している。
話す 聞く	<ul style="list-style-type: none"> ・書く対象についての現状や概要を調べ、まとめていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・書く対象についての問題点(背景・原因)や反対意見を分析し、まとめていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章の種類や目的に応じた、段落の構成を工夫して書いている。 ・論理的に一貫性がある(矛盾していない)。 ・フォーマットを整えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・批判的・創造的な視点から自分の考えを書いている。 ・詩歌の創作において、独創性のある題材・視点を選んでつくっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・誤字脱字や文法的な誤りが見られない。 ・多様な語彙や表現を用いて書いている。 ・適切な文体や句読法を用いて読みやすく書いている。
書く	<ul style="list-style-type: none"> ・評論の背景にある知識や現代社会の諸課題について理解し、説明している。 ・文学的文章の作者について調べ、まとめていく。 ・修辭法・文学的技法やジャンルの特徴について理解し、説明している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・説明的文章の読解において、筆者の主張を理解し、説明している。 ・文学的文章の読解において、本文にもとづきながら自身の解釈を説明している。 ・古典の読解において、文章や表現の意味を理解し、訳している。 ・映像メディアについて、その特性や表現効果を分析し、説明している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章における段落相互の関係や場面の展開について理解し、説明している。 ・文章における接続後や指示語の意味と働きを理解し、説明している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音読・朗読において、表現の意味を考えながら工夫をして読んでいる。 ・文章・表現のリライトにおいて、もとの文章・表現の意味を考えながら工夫をして創作している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章における用語の意味を理解している。 ・文章における文法事項の働きを理解している。
読む	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャンルの背景や時代を代表するものとしての個々の文学作品の知識と理解、およびそれらの相互関係を示す。 ・文学の中で文化的価値が表現されている方法についての理解を示す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字の成り立ちや語彙に関する知識と理解を示す。 ・詩や古文、漢文、百人一首などを暗唱している。 ・書写に関する事項についての知識と理解を示す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字の成り立ちや語彙に関する知識と理解を示す。 ・詩や古文、漢文、百人一首などを暗唱している。 ・書写に関する事項についての知識と理解を示す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字の成り立ちや語彙に関する知識と理解を示す。 ・詩や古文、漢文、百人一首などを暗唱している。 ・書写に関する事項についての知識と理解を示す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字の成り立ちや語彙に関する知識と理解を示す。 ・詩や古文、漢文、百人一首などを暗唱している。 ・書写に関する事項についての知識と理解を示す。

図2 IB型と文科省型の規準による評価の例

国際中等教育研究

学年	科目	単元	Key concept (重要概念)	Global context	Statement of inquiry (探究テーマ)	使用した教材とその著者(教科書教材には下線)(副教材・参考資料として使用したものも含む)	
MYP 対象学年	1 (中1)	国語	言葉の力に気づく	ものの見方	空間的・時間的位置づけ	言葉とは記号であり、全てのものを表すことができる	谷川俊太郎「はる」 加藤周一「言葉とは何か」 宇治拾遺物語「尼地藏と出会うこと」
			説明文を読む	ものの見方	個人的表現と文化的表現	事実を語る表現にも書き手の意図が反映されている。	小関智弘「ものづくりに生きる」(説明)
			漢字の成り立ち	文化	空間的・時間的位置づけ	文字の成り立ちの背後には先人の工夫がある。	「漢字の成り立ち」
			人間と動物の共存について	ものの見方	科学技術の革新	自分たちが住む世界は全てのもので成り立っている。	若生健二「変わる動物園」(説明) 龍村仁「ガイアの知性」(説明) 高村光太郎「ぼろぼろな駝鳥」(詩)
			自分を愛する心	アイデンティティ	アイデンティティと関係性	自分を愛する心が、他人と出会わせ世界を創造する。	吉播道夫「ぬすびと面」 吉野弘「奈々に」
	2 (中2)	国語	人の心と行動はどうつながっているのか考える	アイデンティティ	アイデンティティと関係性	既存概念を疑うことで考えが深まる。	なだいなだ「逃げることは、ほんとにひきょうか」(評論)
			「記憶」の値打ちについて考える	ものの見方	空間的・時間的位置づけ	時として「記憶」の方が、「記録」よりも鮮明に心によみがることがある。	星野博美「昔話」(随筆)
			ことばのつながり	つながり	個人的表現と文化的表現	単語をつなげることで、新しい意味が生まれる。	大林信彦「幸せなスピード」(随筆) 大江健三郎「吟味された言葉」(随筆)
			手紙でしか言えないことがある	コミュニケーション	個人的表現と文化的表現	手紙でしか言えないことがある。	谷川俊太郎「手紙」(詩) 堀江敏幸「歌でも読む様にして」(随筆)
			なぜと考えながら読む	ものの見方	アイデンティティと関係性	問いを立てて読むと「読み」が深まる。	阿部夏丸「父の上にはなりたくない」(小説) 安岡章太郎「サーカスの馬」(小説)
			誰が文化を創造するか	創造性	空間的・時間的位置づけ	優れた読み手は、新たな文化の創造は、すでに「環境」となり意識されることのない「文化」の上に築かれているということを読み解くことができる。	河合雅雄「若者が文化を創造する」(説明文) 「敦盛の最後」(平家物語より)(古典) 能「敦盛」
	3 (中3)	国語	言葉の働きについて考える	コミュニケーション	個人的表現と文化的表現	言葉の働きを考えることで新しい視点が生まれる。	長田 弘「最初の質問」(詩) 岡本夏木「言葉の共有」(随想)
伝わる意見文を書く			コミュニケーション	アイデンティティと関係性	根拠を示すことで意見をよりよく伝えることができる。	鷲沢萌「ケナリも花、サクラも花」(随想) 書く「批評する言葉 批評文を書く」(表現活動) 野矢茂樹「新版 論理トレーニング」(評論)	
文学を読む			ものの見方	個人的表現と文化的表現	問いを立てて読むと「読み」が深まる。	井上ひさし「握手」(小説)	
比喩表現の達人になる			創造性	個人的表現と文化的表現	比喩は非日常的感觉を効果的に伝える。	開高健「輝ける闇」(小説)	
評論を読む			つながり	空間的・時間的位置づけ	歴史の語り方に、書き手の意図が反映している。	玉木正之「運動会」(評論) 「あのとき それから 運動会が始まる」(朝日新聞 2015/5/9)	
本紹介のスピーチをする			アイデンティティ	アイデンティティと関係性	「書く」ことで読みを焦点化することができる。	「話し言葉で伝えるために」(表現活動) 話す・聞く「パブリック・スピーキング」(表現活動)	
		言葉の力に気づく	つながり	空間的・時間的位置づけ	言葉を通して空間・時間を隔てた他者と対話できる。	別役実「寂しいお魚」(小説) 小林恭二「俳句という愉しみ」(評論) 高橋彦子「ほか」(俳句十五句)(俳句)	
4 (高1)	国語総合 (現代文)	言葉と私	アイデンティティ	アイデンティティと関係性	言葉は人の世界認識のあり方と大きく関わっている。	志賀直哉「日本語廃止論」(評論) 三浦しをん「舟を編む」(小説) 権島忠夫「語と意味」(評論) 中村雄二郎「好奇心」(評論) アルフォンソ・ドーデー「最後の授業」(小説) 鳥飼玖美子「英語公用語」は何か問題か(評論) 永井愛「あまのこ」(戯曲) 田中克彦「ことばと国家」(評論) イ・ヨンスク「国語」という思想(評論) 鈴木孝夫「ものことば」(評論) 内田樹「ことばとは何か」(評論)	
		文学を読む	ものの見方	個人的表現と文化的表現	問いを立てて読むと「読み」が深まる。	芥川龍之介「羅生門」(小説) 『今昔物語集』「羅城門の上層に登りて死者を見たる空人の語」	
		本を紹介する	コミュニケーション	個人的表現と文化的表現	優れた表現は、自己の経験と密接に結びついている。	読書エッセイ、本の紹介スピーチ 石川直樹「歩き続けるための読書」(評論)	
		文化はどのように語られるか	文化	グローバル化と持続可能性	対比は物事をわかりやすくする伝えると同時に、単純化する。	山崎正和「水の東西」(評論) 高階秀爾「聞」の感覚(評論)	
	国語総合 (古典)	歴史的背景と説話の関わり	ものの見方 つながり	空間的・時間的位置づけ	歴史的・社会的文脈に置くことで文学作品の意味が捉えられる。	宇治拾遺物語「ちごのそら寝」	
		登場人物の価値観と歴史的背景	ものの見方 つながり アイデンティティ	個人的表現と文化的表現	個人の価値観は、社会的文脈によって形成され、また社会的文脈を生み出す。	宇治拾遺物語「絵師良秀」・伊勢物語「芥川」	
		旅を定義する	つながり 時間・場所・空間	個人的表現と文化的表現	行動の意義や定義は、どのようなコンテクストの中で読むかによって変わる。	伊勢物語「東下り」(第7段～9段)	
		無常への姿勢	ものの見方 時間・場所・空間	空間的・時間的位置づけ	人間にとっての「時間」の価値や重さへの感覚は時代や社会的背景によって変わることがある。	徒然草「ある人弓射ることを習ふに」	
		正義とは何か	ものの見方 関係性	アイデンティティと関係性	自分にとって正しい「正義」が、他の人にとっては異なる場合もある。	論語	
		生き方を考える	アイデンティティ	アイデンティティと関係性	自己の生き方や人生観には、思想や背景によって異なるものがある。	屈原「漁父辞」	
何をどのように表現するか	美しさ 形式 時間・場所・空間	個人的表現と文化的表現	何かを表現するためには、内容だけでなく、表現する素材や形式との関係が重要である。	柳宗元「江雪」・杜牧「江南春」・杜甫「月夜」・李白「静夜思」			

東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要

MYP対象外の学年	5 (高2)	現代文B	「紙」の可能性について考える			原研哉「情報の彫刻」(評論) 池澤夏樹「本は、これから」(評論)
			文学を読む			中島敦「山月記」 国訳漢文大成 文学部第十二巻 「人虎伝」
			言葉の意味生成の過程について考える			内田樹「物語という欲望」 内田樹「映画の構造分析」(評論) 「第三の意味 映像と演劇と音楽と」 ロラン・バルト(評論)
		古典B	構成に着目して説話を読み解く			『宇治拾遺物語』「袴垂、保昌にあふこと」「漁師、仏を射ること」
			主張の根拠となる事象を捉える			故事「病膏肓に入る」「尾を塗中に曳く」
			語りの世界を表現する			『伊勢物語』「行く蛭」「小野の雪」
	時代背景と社会に対する見方の関わりについて考える				『方丈記』「養和の飢饉」「仮の庵」	
	重陽の節句に関する漢詩を比較して論じる				孟浩然「故人の荘に過る」杜甫「登高」	
	現代文B	他者との対話			岡真理「虚ろなまなざし」(評論) 熊野純彦「同一性という暴力」(評論) 『ピュリッツァー賞受賞写真全集記録』(写真集)	
		近代を読む1			竹内啓「近代合理主義の光と影」(評論) 森鷗外「舞姫」(小説) 前田愛「ベルリン1888」(評論)	
		「表象」出来事を伝えるということ			目取真俊「水滴」(小説) F・ゴヤ「戦争の惨禍」(絵画) R・キャバ「倒れる兵士」(写真) S・ソントグ「他者の苦痛へのまなざし」(評論) H・アーレント「全体主義の起原」(評論) S・スピルバーグ「シンドラーのリスト」(映画) C・ランズマン「ショア」(映画)	
		近代を読む2			岸田秀「擬人論の復権」(評論) 辺見庸「声の諸相」(随想) 太澤真幸「リスク社会とその希望」(評論) 石牟礼道子「後生の桜」(随想)	
		言葉と身体			阪本俊生「ポスト・ブライバシー」(評論) 小浜逸郎「人間の根拠としての『身体』」(評論) 西谷修「問われる『身体』の生命」(評論)	
		古典B	政治的能力とはどのようなものか			『大鏡』「南の院の競射」 『史記』「四面楚歌」
	政治が人に与える影響とは				「捕蛇者説」(文章)	
	人生について考える				『和泉式部日記』「夢よりもはかなき世の中を」	
	「公」と「私」について考える				『源氏物語』「光源氏の誕生」「飽かぬ別れ」	
	古典A (古文)	身分や境遇と人物像の関係性			『源氏物語』「かかやく日の宮」『大鏡』「時平と道真」	
		怪異の背景には何があるのか			『源氏物語』「廢院の怪」「車争ひ」	
		登場人物と語りの視点			『大鏡』「宣耀殿の女御」「中宮安子の嫉妬」	
	古典A (漢文)	歌論における理想の歌とは			『俊頼髓脳』「誹諧歌・連歌」『後鳥羽院御口伝』「おほかたの歌の姿は」	
		正しい生き方とはどのようなものか			『史記』「伯夷列伝」	
		思想と社会との関わりとは			莊子・韓非子	
	国語表現	処世について考える			『史記』「越王句踐世家」	
社会的課題は自己認識にどのようにつながっているだろうか 議論可能(debatable)な問いとは何か				調査・論述・ディスカッション 調査・ディベート・プレゼンテーション・小論文		

図3 2016年度上半期 実践単元一覧表

4. 公開研究会での実践報告(1)

言葉の力に気づく ―古典を通して―

浅井悦代

4.1 はじめに

言葉は、現実世界のものを表す記号である。その記号は、実際にあるもの、ないもの、見たり触ったりできるもの、できないものを表すことができる。また、言葉によってものが見え、その見方も言葉によって変えることができる。抽象的な概念も、言葉があるからこそ、表すことができる。さらに、言葉はものを指し示すだけでなく、人の気持ちを変えたり、相手の行動に影響を及ぼしたりすることもできる。排他的な雰囲気を作ることもできれば、受容的な雰囲気も作ることができる。言葉には様々な力がある。

本単元は、本国語科で目標とする資質・能力のうち、「異文化への寛容性・耐性」を育むことを目指したものである。「異質な他者を理解する」には、「言葉」が必要であり、自分を理解してもらうためにも「言葉」は必要である。そして、この「言葉の力」に自覚的になることが、「異文化への寛容性・耐性」を高めることになると考えた。

4.2 単元の概要

4.2.1 単元設定の理由

本校には、附属小学校から来た生徒や他校からの生徒、海外体験が長い生徒や来日生もいる。生育歴や受けてきた教育歴も様々である。初対面の生徒同士が出会うために、また長い時間をかけてその関係を深化し、多角的な理解をするためにも、「言葉の力」に気づかせ、その使い手になることは重要である。その第一歩として、言葉は記号であり、様々なものを指し示す力があること、ただし、そこには同音異義語による問題や、その言葉の持つイメージが人と違うことによる問題があることに気付かせたい。

「言葉」は抽象的な概念でもあり、中学1年生にとっては、難しい。そのため、1ページに全文が収まり、端的に「言葉とは何か」を説明している加藤周一の「言葉とは何か」を教材として選んだ。また、古典教材を用いることで、「言葉の力」が通時的にも普遍性があることに気づかせられると考えた。「尼地蔵を見奉る事」は内容的にも劇画的でおもしろく、生徒が興味を持って取り組めるだろう。尼が地蔵を見ることができたのは、「念じる力」だと作者は書いているが、そこには尼が用いた「地蔵」という言葉の「力」が働いたとも言えるかもしれない。

「言葉の力」については、1年を通して扱っていきたいと考えている。本単元は、その最初である。

学習指導要領の該当事項

B 書くこと イ 集めた材料を分類するなどして整理するとともに、段落の役割を考えて文章を構成すること。

C 読むこと オ 文章に表れているものの見方や考え方をとらえ、自分のものの見方や考え方を広くすること。

ア伝統的な言語文化に関する事項 (ア) 文語の決まりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること。

4. 2. 2 単元の指導計画（全8時間）

「言葉の力」とはどのようなものかを、加藤周一「言葉とは何か」の説明文で捉える。そして、その考え方をを用いて『宇治拾遺物語』『尼地蔵を見奉る事』を読み、「言葉の力」について分析し、考察を深めさせたい。

第一次（1時間） 導入

前単元の谷川俊太郎の詩「はる」で学習した「言葉の力に気づく」ことを振り返る。

第二次（3時間） 加藤周一「言葉とは何か」

加藤周一「言葉とは何か」を読み、「人間は身のまわりにあるもの、ないもの、見たり触ったりできるもの、できないもの、そのほとんど全てに『言葉＝記号』を割り振ることができる」ところから言葉の力に注目する。そして、「言葉＝記号」という考え方を絵で可視化する。

第三次（3時間） 「尼地蔵を見奉る事」

『宇治拾遺物語』『尼地蔵見奉る事』を読み、登場人物「尼」と「博打」それぞれが使っている「ぢざう」という言葉の捉え方の違いを、加藤周一の考え方をを用いて絵で表す。それから、両者の言葉の捉え方の違いを整理し、言葉の力を明らかにする。

第四次（1時間） 「分析と考察」

二つの教材から、「言葉の力」を分析し、考察を深める単元にする。

4. 3 本時の展開（全8時間中の7時間目）

公開授業における本時の目標は次の二点とした。

- ・加藤周一の考え方をを用いて、「地蔵に会いたい尼」と「地蔵という名前の童を紹介した博打」との「ぢざう」という言葉の違いを絵で可視化する。
- ・「尼」と「博打」の記号としての言葉の違いを整理し、そこで働く言葉の力を明らかにする。

本時では、先ず、「地蔵に会いたい尼」と「ぢざうという名前の童を紹介した博打」との「ぢざう」という言葉の捉え方の違いを比較し、加藤周一の考え方をを用いて、その違いを整理し、発表した。そして、「尼」と「博打」それぞれの用いた言葉の力はどのようなものであるか考えた。最後に、他のグループの発表を聞き、お互いの分析や考察を取り入れて、「尼」と「博打」の「ぢざう」という言葉の捉え方の違いを、より良い絵で表すというまとめを試みた。

授業内で生徒が指摘した重要な点は、「尼」と「博打」の言葉の力は、加藤周一の主張である「世の中にある全てのものを表すことができる」のみでは、説明できないものであり、さらに多角的な力があるということであった。以下に生徒が発表した様々な言葉の力を挙げる。

- ・人をだます力
- ・人を勇気づける力
- ・捉え方によって様々な意味になる力
- ・夢をかなえる力
- ・ひとつの発音で多様な意味を持つことができる力
- ・人の思考を表すことができる力
- ・話し言葉と書き言葉の力の違い

4. 4 単元の振り返り

本単元では、「言葉」という抽象的な概念に対して、加藤周一の「言葉とは何か」と『宇治拾遺物語』の「尼地蔵を見奉る事」の二つの教材を比較することで、言葉の力について分析と考察を深め、自分なりの視点でまとめることを最終的な目標とした。各授業における議論も、生

徒の意見から「言葉の力」の働きや、広がりを知り、自らの言葉への意識を高めていく機会となった。最後の課題「加藤周一の文章と『尼地蔵見奉る事』で書かれた言葉の力について共通点と相違点を捉え、自分の考えを述べる」では、MYPの四つの評価観点「分析」「構成」「創作」「言語」を与え、論じさせた。そこでは、「言葉の力」が人に与える影響や多角的な側面に気づき、「言葉」によって、世界が創造されているという考察までみられた。

本授業を終えてから、ふだんの言葉が、生徒に沁みとおっていくような感覚をおぼえることが多くなった。生徒同士の言葉かけも、以前より語調が柔らかくなり、受けた生徒の表情も穏やかである。学級の雰囲気も以前よりも暖かく心地よいものになり、生徒の様子ものびのびしているように感じるようになった。「言葉の力」について話合い、より深く考え、新たな発見をしていったプロセスがこのような状況に反映されたと考える。ひと月後の「あなたが今学期学んだ知識を今後の生活でどのように使えますか。」という一学期の振り返りには、自分の言葉に焦点を当て、他者に与える影響があることに気づき、言葉の力に敏感になりたいと述べている生徒が多く見られた。「異質な他者」への理解、「異文化への寛容性と耐性」が、ある程度育まれたと言ってよいだろう。

「言葉の力」について、より探究を深めるためには、こちらから与える問いだけでなく、生徒から問いが発せられ、追究していくような単元を考えていく必要がある。今後の授業の展開に生かしていきたい。これからも「言葉の力」について、注意深い生徒を育成できるよう、心掛けたい。

5. 公開研究会での実践報告(2)

ナレーション作成を通じて物語を問い直す —『伊勢物語』を語る—

宇佐見尚子

5. 1 はじめに

古典を深く理解するには、一つ一つの言葉の持つ意味やイメージを大切にするとともに、背景となる価値観や美意識を知ることにも必要である。しかし、生徒にとって古語は難しく、古典の世界は理解しがたいものとして捉えられがちである。『伊勢物語』は古典の中でも、とりわけ様々な訳や絵画化された資料が豊富な作品である。それらの『伊勢物語』に関する書籍や資料を活用しながら、原文を口語訳しただけではなかなかイメージできない情景や言葉の象徴的な意味・登場人物の思いなどを絵や写真・音なども加えてわかりやすく他者に伝えることで、古典の作品世界を具体的に想像して表現する力を培うことをねらいとした実践である。『伊勢物語』のナレーション（視聴覚資料を交えながら話をわかりやすく説明する文章）を作成し、自分たちで作品世界を構築することによって、作品に対する実感を伴う理解へとつなげ、さらに、『伊勢物語』とはどのような作品であるのか、考察するきっかけとしたいと考えた。

5. 2 単元の概要

5. 2. 1 単元設定の理由

本単元は5年生を対象とし、平成28年度1学期に行った古典Bの授業実践である。『伊勢物語』の様々な訳や漫画・絵画資料などを紹介し、『伊勢物語』には様々な解釈や享受のあり方があることを踏まえ、『伊勢物語』「行く蜚」「小野の雪」（「古典B古文編」筑摩書房）を教材として、グループでのナレーション作成を通じて、作品世界をイメージ豊かに表現する力を育むことを目指し、単元を設定した。

また今年度本単元の前に「構成に着目して説話を読み解く」という単元を行っており、今回の『伊勢物語』を扱った単元においても、原文の話の構成に目を向け、グループでナレーションを作成していく過程において、効果的な構成とはどのようなものか意識させ、『伊勢物語』の作品性を考察することもねらいとした。

5. 2. 2 単元の指導計画（全8時間）

『伊勢物語』「行く蜚」「小野の雪」を読解し、登場人物や場面構成について整理してワークシートにまとめた上で、各グループどちらかの段を選んでナレーションを作成した。

最初に、話の内容が聞き手により伝わるように言葉を補いながら工夫して文章を作成した。その後、作成した文章をよりイメージ豊かにするためにはどのような絵や写真・音などを加えると効果的であるか考察し、ナレーションを完成させた。

原文を音読してから自分たちで作成した文章を視聴覚資料も取り入れて発表し、発表に対して相互評価を行った。原文と自分たちが創り上げた作品世界の共通点と相違点を分析する中で、作品に対する新たな視点を発見することも目標とした。

第一次（1時間）『伊勢物語』の概要

- ・『伊勢物語』とはどのような作品か、ジャンルや特徴を確認する。
- ・『伊勢物語』「行く蜚」「小野の雪」の訳や漫画・絵画等を紹介することで、同じ段でも訳し方や絵があるかどうかで作品に対する受け取り方がどのように変わるか、問題提起をする。
- ・『伊勢物語』「行く蜚」「小野の雪」を読解した上で、ナレーションを作成することを伝え、ねらいを説明する。

第二次（5 時間）『伊勢物語』「ゆく蛍」「小野の雪」読解・ナレーション作成

- ・「行く蛍」「小野の雪」の読解（2 時間）
重要な古語や「蛍」「雁」「小野」の持つイメージ、人物関係や和歌の内容を読解し、ワークシートにまとめる。
- ・メディアセンターの資料を活用し、話の内容を語り、説明する文章を作成する。（2 時間）
（練馬区の図書館や東京学芸大学附属図書館等から『伊勢物語』やナレーションに関する書籍を借りてメディアセンターにコーナーを設けた）
原文をどのように音読すると内容が聞き手により伝わるかを考えた上で、ナレーションの文章でも、どのような点を重視して工夫するのか、グループで話し合う。
- ・作成した文章にどのような絵や写真・音を加えると効果的かを考える。（1 時間）
文章と視聴覚資料をどのように組み合わせるか、構成を練る。
原文を音読する分担とナレーションの分担を確認する。
グループで作成したナレーションの工夫した点が明確で効果があるか、話し合う。

第三次（2 時間）発表・相互評価・振り返り

- ・工夫した点を聞き手（受け取る側）に伝えた上で 4 グループ発表し、相互評価をする。（1 時間）
- ・2 グループ発表し、相互評価をする。ナレーション作成や他のグループの発表を通じて気づいた点を振り返り、400 字でまとめる。（1 時間）

5. 3 本時の展開（第 7 時間目）

本時の目標

- ・具体的にイメージを広げて、『伊勢物語』の世界を生き生きとわかりやすく他者に伝える。
- ・ナレーション作成において、どのような点を工夫したのか、明確にする。

本時の評価規準

- ・『伊勢物語』の世界をわかりやすくイメージ豊かに他者に伝えることができたか。
- ・ナレーション作成での工夫した点が、聞き手（受け取る側）にも明確であったか。

本時の学習過程

本時の導入としてまず発表のねらいを確認した。最初に各グループ原文の音読やナレーションの分担の仕方・発表で工夫する点を確認し、共有した上で、「行く蛍」3 グループ、「小野の雪」1 グループが発表した。各グループ原文の音読とナレーションをあわせて 10 分の発表時間とした。

各グループ原文の音読で工夫した点とナレーションで重視した点について、最初に伝えてから発表を行った。発表に対して、①「音読の工夫した点が伝わったか」②「ナレーションで重視した点が伝わったか」③「ナレーションの発表で人物像や情景が伝わったか」という 3 つの観点で評価した。

また、ナレーションに関しては評価シートになぜそのように評価したのか、根拠を記入する欄を設け、なるべく具体的に根拠を挙げるよう指示した。4 グループの発表が終わったところで、発表を比較して気づいたことや原文の音読とナレーションの発表を比較して気づいたことをワークシートに記入するように伝えた。「行く蛍」のナレーションでは「蛍」をいかに効果的に表現するかを重視して工夫しているグループが多かった。またより男の思いを伝えるために「行く蛍」を男の 1 人称で語ったグループがあり、生徒は発表で気づいたこととして「作品を

様々な視点から見てみると、作品自体の雰囲気もかなり変化した」ということを挙げていた。生徒はこの『伊勢物語』の発表を通して、各グループの共通点だけでなく、同じ作品をもとにしても、様々な伝え方があるということを実感できたようである。

5.4 単元の振り返り

本単元では、『伊勢物語』の中で「行く螢」「小野の雪」の二つの段を教材として扱ったが、それぞれの段によって、生徒が発表で工夫する方向性の傾向に違いがあるように感じられた。「行く螢」では、男のモデルである在原業平や女を演じることで、男の思いをより伝えようとしたグループが多かったのに対し、「小野の雪」では、業平と惟喬親王の関係性や時代背景・場面転換に注目して、絵画資料やパワーポイントを活用して発表したグループが多かった。発表がバラエティーに富んでいるという点で、考察の材料としては良かったが、今後どのようなことを考えさせたいかということについて、より明確にした上で、教材の組み合わせを吟味していく必要があると感じた。

今回の発表では、まず、同じ段のナレーションで工夫した点の共通点に目を向けることで、その段における「歌」の重要性に気づき、どのような思いが込められているのかという登場人物の心情に焦点をあてて考察することができた。また、同じ作品、同じ段であっても、どのような媒体を用いて発表するか、どのような視点で発表するかによって、作品世界が大きく違ってくるということに気づいた生徒が非常に多かった。

また、自分たちで作品世界について調べてから発表することで、登場人物の心情や時代背景をより理解することにつながったという手ごたえは感じられた。ただし、思いをわかりやすく、実感を込めて伝えようとするあまり、かなり現代的に脚色して発表したグループもあった。気持ちを伝えるという面では評価できるが、オリジナルの世界の情景や雰囲気を変えてしまうことに関してどこまで認めるか、どのように指導していくかが、今後の課題である。しかし、原文の世界をナレーションでそのまま再現することは不可能であり、原文の世界とナレーションを比べることで、脚色された世界との違いを考え、新たな発見へとつなげていくことが重要なのではないかということを実感した。

本単元において、『伊勢物語』の二つの段に関して、情景や人物像に着目して読みを深めるという点や物語の場面転換や視点について考察するという点では効果があったように思われるが、『伊勢物語』の作品性について深く考察するという点に関しては、この二つの段だけからの考察では限界があった。『伊勢物語』という作品自体に対してさらに目を向けていくためには、教材を加えて単元構成を考えていく必要があり、今後新たな単元を開発していく際の課題としたい。

Abstract

At our school, from a 1st academic year to a 4th academic year, we teach and guide on the basis of International Baccalaureate MYP (Middle Years Program) in parallel with the course guidelines of Japan. This program has salient features from several perspectives such as emphasis on understanding the concepts and exploratory learning. However, in this paper, we have covered the initiatives taken by the Department of Japanese Language of our school focusing on the evaluation criteria.